

施工方法と注意事項 (Iq システム支保工)

四角塔式型枠支保工

[1] 四角塔式型枠支保工の組立基準

(1) 全体

- 1) 支保工の組立においては、指定の部材を使用し、その使用部材を指定された方法で結合して下さい。
- 2) I q システムを使用して支保工用支柱に隣接した足場を設置する場合は「I q (アイキュー) SYSTEMを用いた本足場」の組立基準に準じて組み立てて下さい。

(2) 基礎

- 1) 支保工の基礎は十分な支持力を有するものとして下さい。
- 2) 地盤の状況に応じて敷板または敷盤等を用いて下さい。

(3) 支保工の脚部

- 1) 支柱の間隔は、桁行方向 1829mm 以下、梁間方向 1829mm 以下として下さい。
- 2) 支柱の最下端にはジャッキ型ベース金具 (認定品) を使用し各支柱のレベルを揃えて下さい。
- 3) 組立直後及び使用中はジャッキ型ベース金具のハンドルに遊びが無いか確認して下さい。
- 4) ジャッキ型ベース金具の最大使用長は 350mm として下さい。
- 5) 最下端の支柱の下部には根がらみを桁行方向、梁間方向それぞれに設けて下さい。但し、ジャッキ型ベース金具を敷板に 2 箇所以上釘止めする場合は敷板方向の根がらみを省略することができます。

(4) 支柱の組立

- 1) 支柱の継ぎ足しは、ほぞに支柱を差し込み、ジョイント部はロックピンにより抜け止めを確実に行って下さい。
- 2) 最下端の支柱には原則として下部支柱 (IqA- ** A) を使用して下さい。
- 3) 最上端の支柱は大引受ジャッキを設置するため、ほぞの付いていない上部支柱 IqA-06U を使用して下さい。

(5) 布材

- 1) 布材は支柱のフランジに正しく差込み、しっかりと緊結されるまでくさびを確実に打ち込んで下さい。
- 2) 桁行方向布材無しで組み立てる場合は以下に従って下さい。
 - ① 梁間方向構面の垂直高さ 1900mm 以下毎に布材を設けて下さい。但し、図のように最上端に先行手摺が取り付けられる場合は最上端の布材を省いて構いません。
 - ② 梁間方向及び桁行方向構面の最下端並びに桁行方向構面の最上端には布材を設けて下さい。

- 3) 桁行方向布材有りで組み立てる場合は以下に従って下さい。

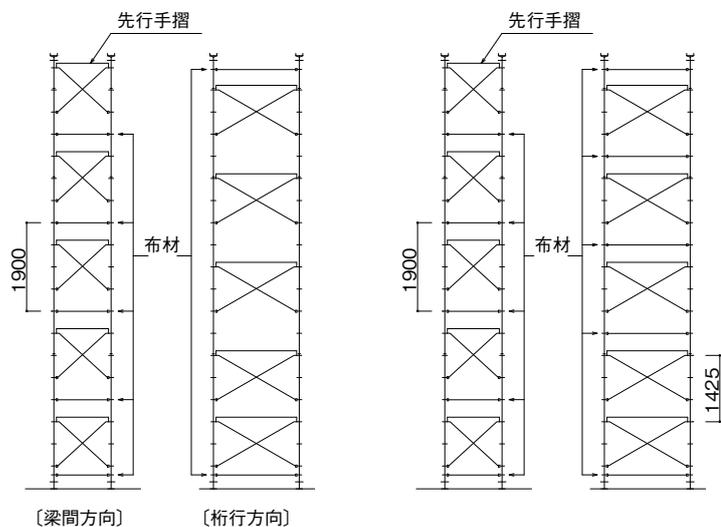
- ① 梁間方向及び桁行方向構面の垂直高さ 1900mm 以下毎に布材を設けること。但し、以下のような場合には布材を省いて構いません。

- (ア) 最上端に先行手摺が取り付けられる場合の最上端。

- (イ) 1 層目と 2 層目の先行手摺の垂直間隔が 1425mm となる場合の先行手摺間。

- ② 梁間方向及び桁行方向構面の最下端並びに桁行方向構面の最上端には布材を設けて下さい。

布材 (手摺 IqC- ***)



桁行き方向布材無し

桁行き方向布材有り



施工方法と注意事項 (Iq システム支保工)

(6) 先行手摺

- 1) 先行手摺は水平材端部の上部取付金具 (フック) を支柱のフランジに確実に引っ掛け、下部取付金具 (コ型金具) を支柱フランジに取り付け、くさびを確実に打ち込んで下さい。
- 2) 先行手摺は四角塔の四構面に垂直高さ 1900mm 以下毎に全高にわたって設けて下さい。

(7) 大引受ジャッキ

- 1) 支柱の上端には、高さ調節と解体時の応力解放のため大引受ジャッキを設けて下さい。
- 2) 大引受ジャッキはジャッキ型ベース金具 (認定品) と同等以上の性能を有するものを使用し、使用高さは 350mm 以下として下さい。
- 3) 組立後、大引受ジャッキのハンドルに遊びが無いことを確認して下さい。

(8) 水平変位の拘束、転倒防止対策等

組立高さが支柱間隔の5倍を超える場合は5層以下毎かつ上端付近に大つなぎ及び大筋違または壁当て等を設け水平変位を拘束して下さい。

【2】 四角塔式わく支保工の使用基準

(1) 支柱の許容支持力

支柱の許容支持力は以下の表のとおりとして下さい。

組立条件	桁行方向布材無し	桁行方向布材有り
許容支持力 kN / 1 支柱 (t / 1 支柱)	22.56 (2.3)	28.44 (2.9)

(2) 先行手摺の許容水平抵抗力

先行手摺の許容水平抵抗力は以下の表のとおりとして下さい。

組立条件	桁行方向布材無し	桁行方向布材有り
許容水平抵抗力 kN / 1 枚	3.1	3.1



施工方法と注意事項 (Iq システム支保工)

ベタ支柱式型枠支保工

[1] ベタ支柱式型枠支保工の組立基準

(1) 全体

- 1) 支保工の組立においては、指定の部材を使用し、その使用部材を指定された方法で結合して下さい。
- 2) I q システムを使用して支保工用支柱に隣接した足場を設置する場合は「I q (アイキュー) SYSTEMを用いた本足場」の組立基準に準じて組み立てて下さい。

(2) 基礎

- 1) 支保工の基礎は十分な支持力を有するものとして下さい。
- 2) 地盤の状況に応じて敷板または敷盤等を用いて下さい。

(3) 支保工の脚部

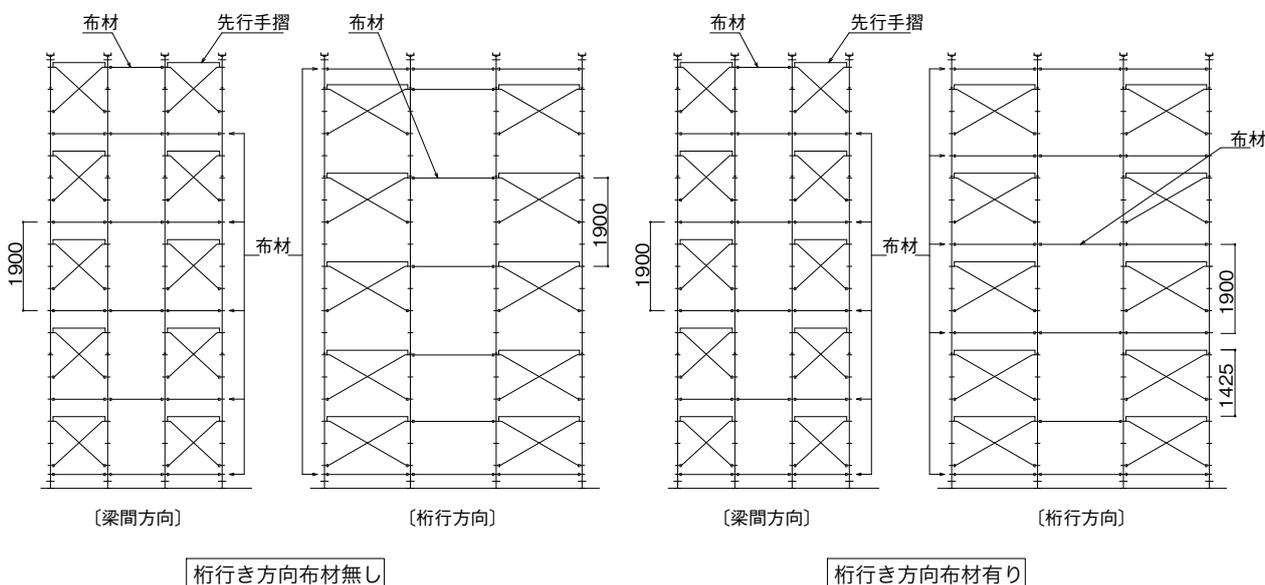
- 1) 支柱の間隔は、桁行方向 1829mm 以下、梁間方向 1829mm 以下として下さい。
- 2) 支柱の最下端にはジャッキ型ベース金具(認定品)を使用し各支柱のレベルを揃えて下さい。
- 3) 組立直後及び使用中はジャッキ型ベース金具のハンドルに遊びが無いか確認して下さい。
- 4) ジャッキ型ベース金具の最大使用長は 350mm として下さい。
- 5) 最下端の支柱の下部には根がらみを桁行方向、梁間方向それぞれに設けて下さい。但し、ジャッキ型ベース金具を敷板に 2 箇所以上釘止める場合は敷板方向の根がらみを省略できます。

(4) 支柱の組立

- 1) 支柱の継ぎ足しは、ほぞに支柱を差し込み、ジョイント部はロックピンにより抜け止めを確実に行って下さい。
- 2) 最下端の支柱には原則として下部支柱 (IqA- ** A) を使用して下さい。
- 3) 最上端の支柱は大引受ジャッキを設置するため、ほぞの付いていない上部支柱 (IqA- 06U) を使用して下さい。

(5) 布材

- 1) 布材は支柱のフランジに正しく差込み、しっかりと緊結されるまでくさびを確実に打ち込んで下さい。
- 2) 桁方向布材無しで組み立てる場合は梁間方向構面の垂直高さ 1900mm 以下毎と全構面の支柱の最下端及び最上端の支柱フランジ部に布材を設けて下さい。但し、最上端の支柱フランジ部に先行手摺の水平材が取り付く場合は布材を省いても構いません。また、桁行方向構面の先行手摺を設けないスパンには先行手摺の水平材の位置に布材を設けて下さい。
- 3) 桁方向布材有りで組み立てる場合は全構面の垂直高さ 1900mm 以下毎と支柱の最下端及び最上端の支柱フランジ部に布材を設けて下さい。但し、最上端の支柱フランジ部に先行手摺の水平材が取り付く場合は布材を省いても構いません。また、桁行方向構面の 1 層目と 2 層目の先行手摺の垂直間隔が 1425mm となる先行手摺間は布材を省いても構いません。



施工方法と注意事項 (Iq システム支保工)

(6) 先行手摺

- 1) 先行手摺は水平材端部の上部取付金具(フック)を支柱のフランジに確実に引っ掛け、下部取付金具(コ型金具)を支柱フランジに取り付け、くさびを確実に打ち込んで下さい。
- 2) 先行手摺は、先行手摺に作用する照査水平荷重が先行手摺の許容水平抵抗力を超えないように必要枚数を算出し、各行及び各列の構面内に配置して下さい。

例

1 構面の全支柱にかかる荷重の合計をWとすると、鉛直荷重の5%の照査水平荷重Qは

$$Q = 0.05 W$$

先行手摺1枚の許容水平抵抗力をq、先行手摺の必要枚数をn(整数)とすると

$$0.05 W \leq n \times q \text{ よって } n \geq 0.05 W / q$$

但しnは整数。

- 3) 先行手摺は垂直高さ1900mm以下毎に全高にわたって設けて下さい。
- 4) 先行手摺はできるだけ等間隔に配置し、先行手摺を取り付けないスパンは連続3スパンまでとして下さい。

(7) 大引受ジャッキ

- 1) 支柱の上端には、高さ調節と解体時の応力解放のため大引受ジャッキを設けて下さい。
- 2) 大引受ジャッキはジャッキ型ベース金具(認定品)と同等以上の性能を有するものを使用し、使用高さは350mm以下として下さい。
- 3) 組立後、大引受ジャッキのハンドルに遊びが無いことを確認して下さい。

(8) 水平変位の拘束、転倒防止対策等

ベタ支柱式で組立高さが組立巾の5倍を超える場合は上端付近に壁当て等を設け水平変位を拘束して下さい。

【2】ベタ支柱式型わく支保工の使用基準

(1) 支柱の許容支持力 支柱の許容支持力は以下の表のとおりとして下さい。

組立条件	桁行方向布材無し	桁行方向布材有り
許容支持力 kN / 1 支柱 (t / 1 支柱)	22.56 (2.3)	28.44 (2.9)

(2) 先行手摺の許容水平抵抗力

先行手摺の許容水平抵抗力は以下の表のとおりとして下さい。

組立条件	桁行方向布材無し	桁行方向布材有り
許容水平抵抗力 kN / 1 枚	3.1	3.1

